

Title	序
Sub Title	
Author	国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.2 (2010. 2) ,p.v- vii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100228--004">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100228--004</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 序

霜野壽亮先生は、本年三月末日をもつてご定年を迎えられ、慶應義塾大学法学部をご退職される。先生のご退職は学部として非常に寂しい。時間は無情である。先生のご退職に際し、先生からいただいた多くのご指導を想い、学部としてここに謹んで『法学研究』退職記念号を編集し、心から感謝の意を表したい。

霜野先生は、昭和四四（一九六九）年に法学部助手に就任して以来、今日まで四〇年の長きにわたり、本塾法学部において社会学、政治権力論を専攻分野として研究と教育にご尽力され、慶應義塾のこの分野の学問系譜に大きな足跡を残された。専任講師に就任以来、先生は研究会（ゼミ）を中心に学生指導にも傾注された。それ以来ご退職の直前まで、先生を慕う多くの学生が研究会の門を叩き、薫陶を受けた。この間、先生は一九七八年に助教授、一九八八年に教授に昇任された。

霜野先生は政治学科のお二人の先達により学者としての知的訓練を受けられた。お一人は学部時代の研究会（ゼミ）の恩師である十時巖周名誉教授であり、もうお一人は大学院と新聞研究所（現在のメディア・コミュニケーション研究所）においてご指導を受けた生田正輝名誉教授である。このお二人の先生のもとで、霜野先生は社会学と政治社会学の知的深みに惹き込まれていったという。

学問の分野で、先生は一貫して社会学の理論的研究を志向された。博士論文であり、後に単著として上梓された『政治権力研究の理論的課題』（慶應義塾大学法学研究会叢書、一九九一年）は、社会学、政治学のさまざまな理

論的課題について深い洞察力を加えた優れた研究業績である。霜野先生は、T・パーソンズらの構造・機能主義の社会学理論から研究に着手した。一九六〇年代の理論的動向は、社会学におけるパーソンズ、政治学におけるD・イーストンなどシステム論や体系論が全盛であり、先生は政治権力の測定などについて、ダールとハンターのコミュニティ・パワー・ストラクチャー(CPS)論争などを手がかりに研究に専念した。しかし、七〇年代以降、先生は権力の源泉となっている行為、相互作用、勢力、正統性などの諸概念について次々と理論的検討を加えられた。七〇年代以降の現代社会理論の展開においては、現象学や主観性、相互主観性の議論が重要になっていった。

行為理論、システム理論においては、ニクラス・ルーマンの機能主義(機能・構造主義)が決定的に重要となった。そこで先生の理論的探求は、A・シュッツ、N・ルーマン、J・ハーバーマス、A・ギデンズ、エスノメソドロジーへと進んでいった。また日本の研究者においても、高田保馬から廣松渉にいたるまで、社会学に収まらない知的探求を深めるようになった。政治権力論から始まった先生の理論研究は、勢力や権威、強制力や暴力とも関連をもちながら、一方で間主観性や自明性、理解や信頼などの根源的、哲学的な主題へと向かっているように思われる。

霜野先生の知的誠実さと学問への真摯な態度は、同僚・後輩の研究者や門下の人たちに強い影響を与えている。先生が大学院生時代に作成されたという「パーソンズ読解ノート」の克明さと詳細さは、今も後輩たちの間では「神話」として伝承されているという。また、教育者としての先生は、いつも学生、院生たちに熱心に、そして温かく接した。論文指導を受け、多くの分野で活躍する門下生たちは、論文構成や文章添削にいたるまでの熱心な指導を忘れることができないという。

先生は二〇〇〇年から通信教育部副部長に就任され、当時の部長の内閣府転出にともなって、二〇〇一年一月

から九月まで空席となった通信教育部長の重責を担われた。法学部内では、大学院法学研究科学習指導委員、『法学研究』編集主任、学部学習指導副主任などを務められるなど、学部行政においても多大な貢献を残された。霜野先生と私との接点は、先生が法学部学習指導副主任として活躍された一九九〇年代初頭、先生と私はいわばコンビを組んで学習指導の仕事を担当したときである。先生は学生たちができるかぎり学業に専念しやすい環境が維持できるよう細心の注意を払うなど、常に温かい眼差しを忘れなかった。これは先生の人間性の現れであった。

法学部政治学科の今日の名声を築いたお一人である霜野壽亮先生が学部を去られることは誠に残念である。先生は、しばしば体調がすぐれないことがあったにもかかわらず、ご無理をされて学部のためにご尽力くださった。今後は、霜野先生がご健康にくれぐれもご留意されつつ、ご自身の学問をさらに発展させることを心より祈念したいと思う。

平成二二年一月

法学部長 国分良成